

## 高校生における性役割と精神的健康との関係\*

筑波大学心理学系 松原 達哉

中央学院高等学校 会沢 信彦

The relation between sex role and mental health among high school students.

Tatsuya Matsubara

(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305, Japan)

Nobuhiko Aizawa

(Chuogakuin High School, Chiba, 270-11, Japan)

This research aimed at studying the relation between sex role and mental health among high school students.

Two studies were used for the research. In study I (preparatory study); 135 high school students were instructed to rate 80 adjectives as "masculine" or "feminine". In study II (main study); the original sex role inventory and the questionnaire about mental health were prepared, and administered to 578 high school students.

The subjects were divided into four types: MF type (high masculinity-high femininity), Mf type (high masculinity-low femininity), mF type (low masculinity-high femininity), and mf type (low masculinity-low femininity). Regarding mental health, the students with MF and Mf types were found to be significantly superior to those with mF and mf types. High masculinity might mean, as it were, high "humanity".

Key words: sex role, masculinity, femininity, mental health, high school students.

### 1 はじめに

性役割とは、いわゆる「男らしさ」「女らしさ」に代表されるような、性に応じて社会から期待される一連のパーソナリティ特性である。性役割はそもそも性度と呼ばれ、男性性 (Masculinity) を一方の極とし、女性性 (Femininity) をその対極とする、一次元上に位置づけられるものと考えられてきた。それに対して Constantinople, A. (1973) は、男性

役割と女性役割とは別の次元に属するものであり、1人の人間の中に両者が混在することもありうることを示唆した。これに基づいて Bem, S. L. (1974, 1975) は、男性役割と女性役割との両者を兼ね備えたいわゆる Androgyny が、状況に応じて柔軟な行動を取ることができ、精神的に健康であることを指摘した。

一方、発達課題論で著名な Havighurst, R. J. (1953) も述べているように、従来の青年心理学においては、男子であれば男性としての、女子であれば女性としての、それぞれ適切な性役割を獲得することが、青年期の重要な発達課題とされてきた。つまり、男子

\* 本研究は松原の指導による会沢の修士論文を要約したものである。

は「男らしく」、女子は「女らしく」なることが、青年期における精神的健康の指標とされてきたのである。

このように、性役割と精神的健康との関係に関しては、一致した結論は見出されていない。しかし、青年期にとって性役割の選択が大きな意味を持つことだけは確かである。したがって、性役割と精神的健康との関係は、青年期研究において十分な注意が払われなければならないものと思われる。

## 2 目的

本研究の目的は、高校生を対象に2つの調査を行い、性役割と精神的健康との関係を明らかにすることである。まず、調査Ⅰによって高校生における認知のレベルでの性役割ステレオタイプを明らかにし、それを基に性役割尺度を作成する。次に調査Ⅱでは、作成した性役割尺度を用いて、自己概念のレベルで性役割ステレオタイプを身につけている程度を測定し、それによって被調査者を性役割の4タイプに分類する。同時に精神的健康に関する調査も行

い、4タイプごとに精神的健康の程度を比較する。また、性役割に関する調査結果より、現代高校生における性役割の諸相をも明らかにする。

## 3 方法

### I. 調査Ⅰ (予備調査)

#### 1. 目的

高校生における認知のレベルでの性役割ステレオタイプを明らかにすると同時に、性役割尺度作成のための基礎資料とすることを目的とする。

#### 2. 方法

茨城県内の男女共学校2校に在席する高校2年生135名(男子62名、女子73名)を対象に、性役割に関係すると思われる性格を記述する形容語80語を提示し、それらが「男性によく見られるもの」(男性役割)か、「女性によく見られるもの」(女性役割)か、「どちらともいえない」かを評定させた。

#### 3. 結果と考察

80項目(性格を記述する形容語)中、「男性によく見られる」(男性役割)、「女性によく見られる」(女

Table 1 男性役割・女性役割・「どちらともいえない」への高支持率項目

男性役割		女性役割		「どちらともいえない」	
項目	支持率(%)	項目	支持率(%)	項目	支持率(%)
力強い	91.1	チャーミングな	88.1	客観的な	62.2
たくましい	88.1	しとやかな	87.4	まじめな	61.5
頼もしい	83.0	かわいい	87.4	明るい	59.3
野心的な	77.8	愛らしい	83.7	頭の良い	58.5
冒険的な	73.3	おしゃべりな	80.7	親切的な	57.8
決断力のある	68.1	色気のある	80.0	社交的な	57.0
さっぱりした	64.4	華やかな	79.3	感覚的な	55.6
こだわりのない	63.7	世話好きな	79.3	主観的な	52.6
包容力のある	63.7	家庭的な	76.3	自信のある	51.1
度胸のある	61.5	おちゃめな	74.8	従順な	50.4
リーダーシップのある	60.7	つつましい	69.6		
行動力のある	59.3	きれい好きな	66.7		
攻撃的な	59.3	優雅な	65.9		
ニヒルな	54.1	繊細な	65.9		
辛抱強い	51.1	魅力的な	65.9		
		控えめな	64.4		
		気が利く	59.3		
		清潔な	59.3		
		丁寧な	57.0		
		派手な	54.8		
		感情的な	53.3		
		愛情豊かな	52.6		
		おしゃれな	52.6		

性役割), 「どちらともいえない」として, 被調査者全体から50%以上の支持を得た項目を, Table 1 に示す.

それによると, 現代高校生においても, 伝統的な男性性(男らしさ), 女性性(女らしさ)が大部分, 男性役割, 女性役割のステレオタイプとして認知されていることが明らかとなったが, 高支持率の項目は, 男性役割よりも女性役割に多かった. これは男性役割が, 伊藤(1978)の指摘する, 男性にとっても女性にとっても最も高い価値が付与されているとするHumanityとかなりの程度混同されており, 結果として女性役割が明瞭に浮かび上がってきたものと思われる.

## II. 調査Ⅱ(本調査)

### 1. 目的

現代高校生における性役割の諸相を自己概念のレベルで明らかにすると同時に, 被調査者を男女別に自己概念のレベルでの性役割によって4タイプに分類し, 各性役割タイプごとに精神的健康を比較することを目的とする.

### 2. 調査方法および調査内容

茨城県内の男女共学校3校に在席する高校2年生578名(男子283名, 女子295名)を対象として, 以下の2種類の調査を同時に実施した.

#### (1) 性役割に関する調査

調査Ⅰの結果, 「男性によく見られる」, 「女性によく見られる」として被調査者全体で50%以上の支持を得た項目の中から, 男性役割のステレオタイプを表すM尺度12語, 女性役割のステレオタイプを表すF尺度12語よりなる「性役割尺度」(Table 2)を作成, 自分自身にどれぐらい当てはまるかを7段階で評定させた.

#### (2) 精神的健康に関する調査

先行研究を参考に, 「過去からの解放」・「自己受容と自信」・「自己主張と自己表現」・「自己志向」・「積極的人生観」の5領域, 計35項目よりなる「精神的健康に関する調査」(Table 3)を作成, 同様に自分自身にどれぐらい当てはまるかを5段階で評定させた.

### 3. 調査結果の統計処理

#### (1) 性役割に関する調査(性役割尺度)

被調査者を男女別に性役割の4タイプに分類した. すなわち, 男女別にM得点(M尺度での合計得点)・F得点(F尺度での合計得点)(M得点・F得点ともに最高84点, 最低12点)の平均値を求め, 両者ともに平均値より高ければMF型, M得点のみ高ければMf型, F得点のみ高ければmF型, 両者

Table 2 性役割尺度

M尺度	F尺度
決断力のある	愛らしい
行動力のある	おしゃべりな
こだわりのない	家庭的な
さっぱりした	かわいい
辛抱強い	気が利く
たくましい	きれいな好きな
頼もしい	しとやかな
力強い	世話好きな
度胸のある	繊細な
冒険的な	華やかな
野心的な	控えめな
リーダーシップのある	魅力的な

(配列はアイウエオ順)

ともに低ければmf型, とした(Fig.1・2). すなわち, 仮に男性役割のステレオタイプを同性の平均以上に身につけていることを男性的と呼び, 女性役割のステレオタイプを同性の平均以上に身につけていることを女性的と呼ぶとするなら, 男性的でもあり女性的でもあるのがMF型, 男性的であって女性的でないのがMf型, 男性的でないが女性的であるのがmF型, 男性的でもなく女性的でもないのがmf型, ということになる.

#### (2) 精神的健康に関する調査

精神的健康を測定するための信頼性の高い尺度を作成するため, I-T相関分析により, 当該項目の得点と全35項目の合計得点とのピアソンの相関係数が.40以上であった19項目を因子分析にかけ, 「とらわれのなさ」・「自己信頼」・「独立性」の3因子を抽出した. 次に, 各因子5項目づつを用いて下位尺度とし, 3下位尺度, 15項目よりなる「精神的健康尺度」(Table 4)を作成した. さらに, 各被調査者について各下位尺度に属する5項目の得点を合計した値(最高25点, 最低5点)を, それぞれの各下位尺度得点とした.

## 4 結果と考察

### 1. 性役割の諸相

#### (1) M得点・F得点の性差

T検定によりM得点とF得点との男女による差を検討したが, 差は見られなかった. この結果から, 本調査対象の高校生の場合, 自己概念のレベルでは,

Table 3 精神的健康に関する調査

## (1) 過去からの解放

- 
- 1 私は過去のことは過去のことで割り切っている。  
 6 過去の体験が、現在・未来の私のあり方を決定している。(－)  
 11 私はそのときそのときを大切に生きることが重要であると思う。  
 16 私は過去の記憶に悩まされている。(－)  
 21 私は過ちをいつまでも気にするようなことはない。  
 26 私にとって今ここをどう生きるかは重要ではない。(－)  
 31 私は過去の行動にこだわりを感じていない。
- 

## (2) 自己受容と自信

- 
- 2 私は少しぐらい非難されても、あまり自信を失わない。  
 7 私は自分に満足している。  
 12 私は自分で決めたことに自信が持てない。(－)  
 17 私は罪悪感にとらわれやすい。(－)  
 22 私は自分の弱い部分を素直に認めることができない。(－)  
 27 私は自分がダメな人間ではないかという考えに悩まされる。(－)  
 32 私は自分のミスを受け入れることができない。(－)
- 

## (3) 自己主張と自己表現

- 
- 3 私は他人の前ではありのままに振る舞えない。(－)  
 8 私は、2人の人がうまくやっていくためには、自分の気持ちを自由に表現しあうほうがよいと思う。  
 13 私は必要なときには他の人の前でも率直にものを言うことができる。  
 18 私は、自分の気持ちに正直になることは結局は他の人のためにもなると思う。  
 23 相手がどう思おうと、私は好きな人にその気持ちを伝えることができる。  
 28 私は、他の人の前ではあからさまに感じたままを言うべきではないと思う。(－)  
 33 私は自分の意見をはっきり主張することができない。(－)
- 

## (4) 自己志向

- 
- 4 私は自分の気持ちにしたがって物事を決めることが多い。  
 9 何かをするときに、他の人が喜んでくれなければ私も満足できない。(－)  
 14 私はありのままの自分よりも自分に対する世間の目のほうが大切であると思う。(－)  
 19 私は他の人に自分を合わせるよりも、自分の気持ちに正直に生きている。  
 24 私はいつも他の人の期待に沿うよう行動する。(－)  
 29 私の立場を他の人が理解してくれるかどうかは、あまり重要なことではない。  
 34 わたしはいつも他の人の同意がないと行動できない。(－)
- 

## (5) 積極的人生観

- 
- 5 私は「非常にうまくいった」という経験をしたことがある。  
 10 私は不幸な出来事にあつたらしくじけてしまうだろう。(－)  
 15 自分を信じている限り、私はどんな障害でも克服できると思う。  
 20 私は「人生は素晴らしいなあ」と感じた瞬間はない。(－)  
 25 私には人生に立ち向かっていく力があると思う。  
 30 私は、人は本来悪であり信頼できないと思う。(－)  
 35 私は悲しい出来事にも耐えることができるだろう。
- 

(番号は調査用紙での番号を示す。)

((－)は反転項目を示す。)

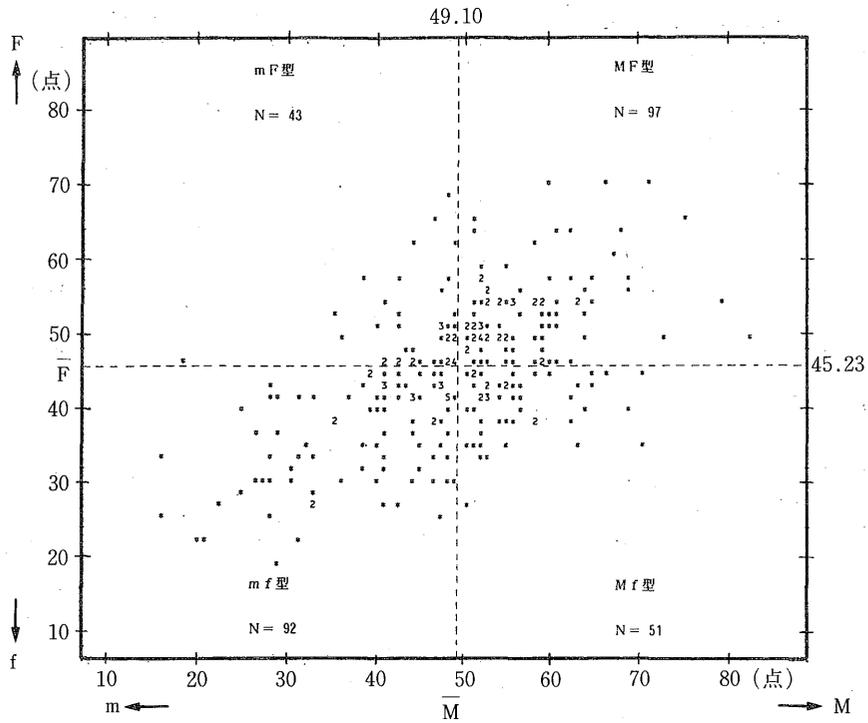


Fig.1 M得点とF得点の散布図および各性役割タイプ的人数 (男子; N=283)

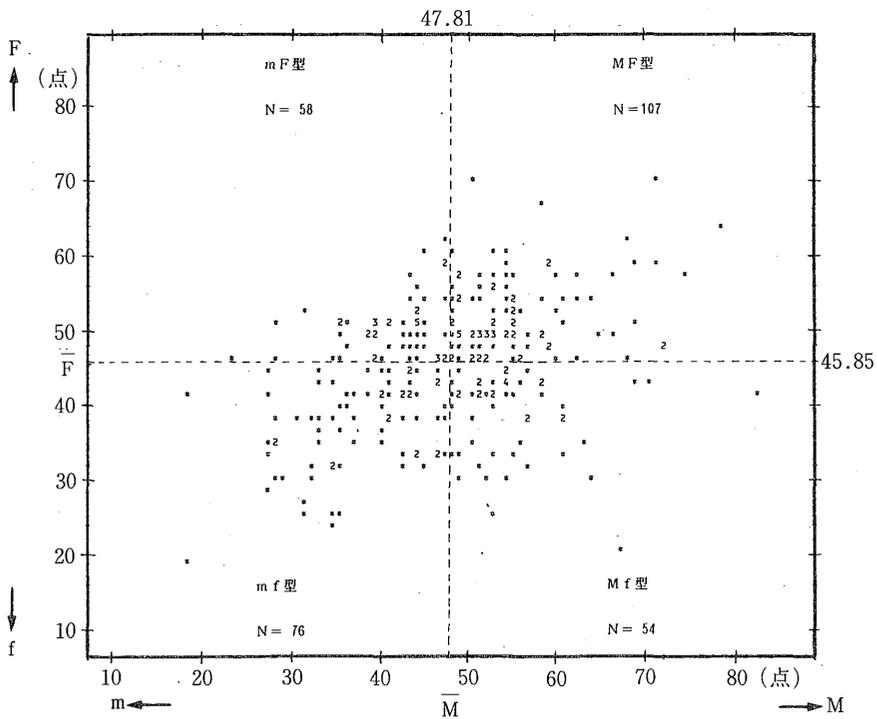


Fig.2 M得点とF得点の散布図および各性役割タイプ的人数 (女子; N=295)

Table 4 精神的健康尺度

## (1) 「とらわれのなさ」尺度

- 
- 1 私は過去のことは過去のことと割り切っている。  
 16 私は過去の記憶に悩まされている。(－)  
 17 私は罪悪感にとらわれやすい。(－)  
 21 私は過ちをいつまでも気にするようなことはない。  
 31 私は過去の行動にこだわりを感じていない。
- 

## (2) 「自己信頼」尺度

- 
- 7 私は自分に満足している。  
 10 私は不幸な出来事にあつたらしくじけてしまうだろう。(－)  
 15 自分を信じている限り、私はどんな障害でも克服できると思う。  
 25 私には人生に立ち向かっていく力があると思う。  
 35 私は悲しい出来事にも耐えることができるだろう。
- 

## (3) 「独立性」尺度

- 
- 3 私は他人の前ではありのままに振る舞えない。(－)  
 12 私は自分で決めたことに自信が持てない。(－)  
 13 私は必要なときには他の人の前でも率直にものを言うことができる。  
 33 私は自分の意見をはっきり主張することができない。(－)  
 34 私はいつも他の人の同意がないと行動できない。(－)
- 

(番号は調査用紙での番号を示す。)

((－)は反転項目を示す。)

性による性役割の区分が崩壊していることが推測される。

## (2) 被調査者内におけるM得点・F得点の比較

T検定により1人の被調査者内におけるM得点とF得点との差を検討したところ、男女ともM得点がF得点よりも有意に高かった。この結果は、伊藤(1978)の指摘する、男性役割の「優位性」と一致する。すなわち、男性役割は女性役割に比べてより高い価値が付与されており、男性役割期待は社会的望ましさと一致するが、女性役割期待はそれとは一致せず、社会的望ましさと別の期待が存在するため、といえよう。

## (3) M得点とF得点との相関

M得点とF得点とのピアソンの相関係数を求めたところ、男子では.55と中程度の相関が、女子では.37と弱い相関が、それぞれ認められた。すなわち、伝統的な「男らしい男性」「女らしい女性」は、驚くほど少なかった。この結果は、①男性が女性化し、女性が男性化している、いわば「中性化」。②実際の「男らしさ」「女らしさ」と、自己概念のレベルでの性役割とのズレ。③伝統的な「男らしさ」「女らしさ」に対する、ある種の忌避の存在。などの理

由によるものと思われる。

## 2. 性役割タイプと精神的健康との関係

## (1) 精神的健康の性差

T検定により、精神的健康尺度の各得点の男女による差を検討したところ、「自己信頼」得点のみ、男子が女子よりも有意に高かった。

この結果は、①青年期の女子の不安は男子に比べて高いこと。②柏木(1974)や伊藤(1978)の指摘するように、女性役割が男性役割に比べて低い価値しか与えられておらず、社会的望ましさと一致しないため、女子が矛盾や葛藤を抱えているものと思われること。を予想させるものである。

## (2) M得点・F得点と精神的健康との関係

M得点・F得点と精神的健康尺度の各得点との相関を求めたところ、男女ともにM得点との相関は比較的高く、F得点との相関は低いか、ほとんど見られなかった。すなわち、M得点と精神的健康尺度の各得点とのピアソンの相関係数は、精神的健康尺度全体、「とらわれのなさ」尺度、「自己信頼」尺度、「独立性」尺度の順に、男子では、.57、.31、.53、.51であり、女子では、.55、.29、.44、.56で一般

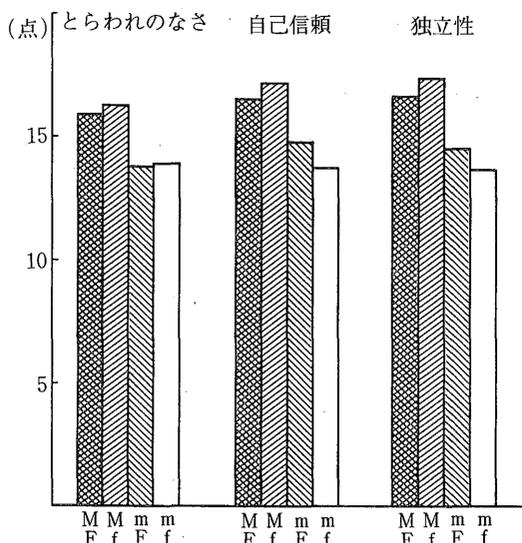


Fig.3 各性役割タイプの精神的健康尺度得点 (男子)

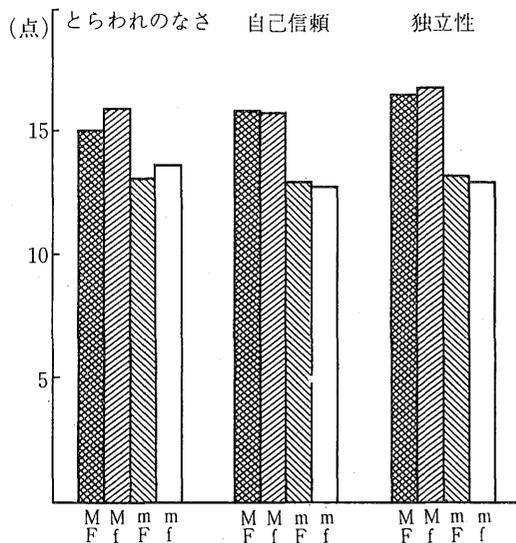


Fig.4 各性役割タイプの精神的健康尺度得点 (女子)

に高い相関であった。一方、F得点と精神的健康尺度の各得点とのピアソンの相関係数は同様に、男子では、.20, .07, .21, .20であり、女子では、.07, -.05, .13, .09でいずれも低い相関であった。

(3) 性役割タイプ別精神的健康の比較 (Fig.3・4)

分散分析および多重比較の結果、精神的健康尺度の得点は、各下位尺度得点のいずれにおいても男女を問わず、MF型およびMf型が、mF型およびmf型に比べ有意に高く、MF型とMf型、mF型とmf型との間には、有意な差は見られなかった。すなわち、(2)の結果からも分かるように、精神的健康尺度の得点は、男女ともにM得点とのみ関係し、M得点が高ければ高く、M得点が低ければ低かったが、F得点との関連は見られなかった。この結果については2つの解釈が可能であるように思われる。

第1は言うまでもなく、M尺度によって測定される男性役割そのものが精神的健康と関係しているのではないかということである。

第2に考えられるのは、M尺度が測定しているものがそもそも“性”役割としての男性役割以外のものではないかということである。なぜなら、「性役割の諸相」で明らかになったように、M得点およびF得点に関しては男女による差はなく、“性”役割尺度であるはずのM尺度・F尺度を用いて、現実の男女を識別することは全く不可能であったからである。

では、M尺度が測定しているものは、いったい何なのであろうか。それは、伊藤(1978)の指摘す

る、両性にとって最も高い価値が付与されているとするHumanityに相当するような、男女を問わず人間として望ましく、人間として期待される、いわば「人間役割」とでも呼ぶべき、一連の性格特性であることが予想される。すなわち、この「人間役割」を身につけているかどうか、精神的健康に影響しているものと思われる。

5 今後の課題

本研究の結果、精神的健康との関係を考えるに当たっては、性役割の測定にはより一層の改善が必要になることが明らかとなった。同様に精神的健康の測定に関しても、慎重な注意が払われなければならない。また、地域差や学校格差など文化的条件を考慮に入れた研究や、被調査者を大学生等に拡大しての研究など、今後はより広範な研究が必要になるものと思われる。

要約

本研究は高校生における性役割と精神的健康との関係を明らかにすることを目的とした。

本研究には2つの調査が用いられた。調査I(予備調査):135人の高校生に80語の形容語を提示し、それらが「男性的」か「女性的」かを評定させた。調査II(本調査):性役割尺度と精神的健康に関する質問紙を用意し、578名の高校生に評定させた。調査の結果から被調査者は、MF型(高男性役割・

高女性役割群), Mf型(高男性役割・低女性役割群), mF型(低男性役割・高女性役割群), mf型(低男性役割・低女性役割群)の4タイプに分類された。

精神的健康は, MF型とMf型とが有意に優れていた。高い男性役割は, いわば高い「人間役割」を意味していることが予想される。

## 文 献

- 栗津幹子・野島一彦・村山正治 1977 自己実現スケールの作成, 九州大学教育学部心理教育相談室紀要, **3**, 117-130.
- 東 清和 1986 a 男性性・女性性の二次元モデル, 早稲田大学大学院文学研究科紀要, **32**, 39-49.
- 東 清和 1986 b 心理的両性具有の類型論, 早稲田大学教育学部学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育編), **35**, 45-58.
- 東 清和・小倉千加子 1982 性差の発達心理, 大日本図書.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of Psychological androgyny *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Bem, S. L. 1975 Sex role adaptability: One consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 634-643.
- Constantinople, A. 1973 Masculinity-Femininity: An exception to a famous dictum? *Psychological Bulletin*, **80**, 389-407.
- 深尾 誠 1981 POI研究の概観および日本版POI作成の試み, 大分大学経済論集, **33**, 58-85.
- 福井康之 1984 自己実現的性格調査票(ISAC)の作成(1), 愛媛大学教育学部紀要(第1部 教育科学), **30**, 35-57.
- 福井康之 1985 自己実現的性格調査票(ISAC)の作成(2), 愛媛大学教育学部紀要(第1部 教育科学), **31**, 1-25.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. New York: Longmans Green.(荘司雅子訳 1958 人間の発達と教育, 牧書店)
- Heilbrun, A. B. 1976 Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 183-190.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究, 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知, 教育心理学研究, **31**, 146-151.
- Jones, W. H., Chernovetz, M. E. & Hansson, R. O. 1978 The enigma of androgyny: Differential implications for males and females? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**, 298-313.
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知, 教育心理学研究, **15**, 193-202.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知II, 教育心理学研究, **20**, 48-58.
- 柏木恵子 1973 現代青年の性役割の習得, 依田新ほか(編), 現代青年の性意識, 現代青年心理学講座5, 金子書房, pp.99-139.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知III—女子学生青年を中心として, 教育心理学研究, **22**, 205-215.
- Maslow, A. H. 1970 *Motivation and Personality*. (2nd. ed.) New York: Harper & Row.(小口忠彦訳 1987 改訂新版・人間性の心理学, 産業能率大学出版部)
- 村山正治・山田裕章・峰松 修・冷川昭子・二藤部里美・深尾 誠 1982 自己実現尺度で測る精神的健康(1), 健康科学, **4**, 177-184.
- 村山正治・山田裕章・峰松 修・冷川昭子・亀石圭志・二藤部里美 1983 自己実現尺度で測る精神的健康(2)—自己実現尺度の統計的分析, 健康科学, **5**, 1-9.
- 村山正治・山田裕章・峰松 修・冷川昭子・亀石圭志 1984 自己実現尺度で測る精神的健康(3)—項目とフォームの決定, 健康科学, **6**, 45-57.
- 鹿内啓子・後藤宗理・若林 満 1982 女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究—性役割タイプと自己能力評価を中心として, 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **29**, 101-136.
- Shostrom, E. L. 1964 An inventory for the measurement of self-actualization. *Educational and Psychological Measurement*, **24**, 207-218.
- Shostrom, E. L. 1966 *EITS Manual for the Personal Orientation Inventory*. San Diego: Educational & Industrial Testing Service.
- Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 29-39.
- 若林 満・鹿内啓子・後藤宗理 1981 女性の社会的役割態度と職業自己イメージ—尺度の構成と比較分析, 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **28**, 71-97.